

「周恩来の日本留学と松本亀次郎」

TNC
通信

2022
4月号



掛川城と掛川桜(早咲きの寒桜)

寅(トラ)の諺

「虎を画(えが)きて狗に類す」一虎の絵を描こうとして失敗し、犬の絵のようになってしまった意味から、素質のないものが、優れた人物の真似をして失敗する譬えである。(『後漢書』馬援伝)

伝えられている。

1913年、多くの青年が日本に留学したが、当時、弘文学院(加納治五郎の創設)は既になく古い留学生達の懇請を受け松本が東亜高等予備学校を創設。その本科に1917年周恩来も入学し東京高等師範学校を目指し勉学に励んだ。周青年は松本に授業の他に個人教授を受けており「周恩来『十九歳の東京日記』」に詳しい。京師法政大学堂(現・北京大学)教授も経ており『中華留学生教育小史』でも両国の親善を図る提案を残すなど79歳で亡くなるまで、日本語教育に生涯を捧げた。



育に生涯を捧げた。

魯迅との関係は？

実は松本は1903年の弘文学院設立時に加納校長に招かれ教鞭をとっており、魯迅は教え子の一人であった。師弟のやり取りは不明だが、1904年、魯迅は仙台に赴くのである。(理事長・水戸雄二)

「私の二つの原点」

副会長兼事務局長・横山弥生

およそ50年前と35年前の記憶が今でも思い出されます。1973年、全校児童100人余りの長野の山の小さな小学校に中国の卓球訪日団が来ました。私達は割り箸に日本と中国の国旗の紙を貼り、校門のところで振りました。中山服を来たおじさん達も自分でも拍手をしていました。日本では迎える方が拍手をして、お客様は手を挙げるか少しおじきをするだけなのに、子供心に不思議な感じがしました。おそらくこれが、私の人生の中で初めて会った外国人だと思います。

1987年、どうしても中国に行きたかった私は、吉林省長春市の東北師範大学に留学しました。ある日、宮城県と吉林省が友好都市関係を締結するとのことで、宮城県関係の留学生が宴会に招かれました。その席でお目に掛かったのが、元宮城県日中友好協会会長の佐々木信男先生。一昨年、実家を整理していたら、佐々木先生が父に宛てた手紙が出てきました。「(娘は)長春で元気にやっている」と書かれていました。

この50年間の中国に関係した記憶は他にもたくさんあります。その時その時に出会った人との一場面が、私の友好活動の原点となっています。引っ越しができないお隣さん同士の日本と中国。これからの50年、私が出会うことで、誰にどんな思いを抱かせ、そして日中友好に繋がっていくのか、コロナで直接会えない今だからこそ、相手と繋がり続ける努力をする必要があると強く感じています。

正常化
50周年
私の想い

「古代中国の24時間—秦漢時代の衣食住から性愛まで」(柿沼陽平著 中公新書 1056円)

「未来からやってきた怪しい人物が、皇帝の許可をもらって帝国(秦・漢時代)の中を散策する」。こんなバーチャルの世界を体験する本である。姓名の決め方、言葉や朝の起床から服装、食事、街の散策、役所での仕事、市場の買物、結婚から子育て等、就寝まで24時間を体験するガイドブックである。

“歴史が楽しくなる”とともに古代帝国の生活史の権威となれるかもしれない。

